

# 幅と厚さの相関図から読む弥生伐採石斧の型式学

—愛媛県大洲市村島石斧生産遺跡の調査によせて—

下條 信行（愛媛大学名誉教授）

## はじめに

愛媛県大洲市菅田にある村島宮の首遺跡からは、多数の各種石斧とそれらの未成品が古くから採集されてきた。近年は大洲市教育委員会の発掘によって新たに同種の新資料が検出され、資料の蓄積が進行している。

ところが、それら資料のほとんどが折損しており、完形品をもってして全貌を掴むのは容易ではない。ここは石斧の、ことに伐採石斧の生産遺跡であり、その製品は大洲市域にとどまらず、南接する西予市域にも齋もたらされており、これからその分布域の調査が重要な課題となってくる。その同定のためにはその型式的特徴の確定が必須であり、多数存する折損品を活かしてその型式的特徴の措定を図って置く必要がある。

筆者は長らく大陸系磨製石器の研究に従事してきたが、従前からその型式学的研究の重要性を説いてきた〔下條 1994〕。土器と同じように磨製石器も取り扱うことによって、磨製石斧もその系譜性、展開性、時代性、地域性を明らかにすることができる、それらの総合として時代と地域の文化性を読み取ることができるだけでなく、機能的展開についても明らかにすることができます。

筆者はこうした観点から及ばずながら伐採石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、大形石庖丁、石戈、石矛などの型式学的研究にトライしてきた〔愛媛大編 2008〕。トータルに取り組んだものもあれば、部分的試行に終わっているものもある。伐採石斧については、東アジアの中での位置づけ、韓日の比較、北部九州での展開などを主な課題としてきたが〔愛媛大編 2008〕、列島レベルでの検討は地域的に限られていて、不十分な状態にある。

弥生時代の伐採石斧の型式学的措定についていえば、敗戦前から「太形蛤刃」と呼称され規定されてきた。その特徴の余りにも見事な印象的表現がゆえに、弥生伐採石斧=太形蛤刃石斧と単純化され、ここで弥生伐採石斧の型式的特徴の追及は思考停止に陥り、学界主流として長らくその深化が図られることはなかった。この単純化は弥生時代の始まりから太形蛤刃石斧があるものと考え、その淵源は半島にあって、それが北部九州に伝わり、太形蛤刃という画一的型式でもって列島各地に伝わったとする誤った思考を導くことにもなった。

筆者のこれまでの弥生伐採石斧研究を総括によれば次のような課題がある。

①弥生伐採石斧は出現期、盛期、終末期とでは型式を異にするものであり、時期に応じて型式変化をおこしている。したがって単純に「太形蛤刃」という型式規定だけではこのように各期あるいは各段階のダイナミックに変転する変化の様を流動的にしなやかにとらえきれないだけでなく、なぜにそのような変転がおこるのかその背景も説明できないのである。そのためには伐採石斧の編年的研究が必要である。

②いわゆる太形蛤刃石斧が盛行するのは大雑把に言って前期後半から中期であるが、弥生伐採石斧は1種類の質量（機能）でまとまっているではなく、出現期においても盛期においても大まかには大小の2種類の伐採石斧で構成されていたようである。このことは伐採一加工工程において伐採石斧の分化が図られていたことを示しているといえるが、ただその分化も後期から終末期にい

たっては小形類に限られてくるような変転を示すので、大小の区分の明確化とその変遷が明らかにされなければならない。

③伐採石斧、ことに「太形蛤刃石斧」の生産においては、集中的に多量に製作するケースと、自己使用目的に個別に製作するケースとがあるが、前者と後者とではその成品の質において違いが生ずる。その違いとは、前者においてはその成品は均質的であり、後者においてはバラツキがみられると考えられるが、その検証が必要である。この相違は幅厚相関図で視覚化が可能である。これは生産体制の相違に基づくものであり、流通問題の解明にも関わってくる。

④蛤刃石斧の大量生産を集中的に図ったいくつかの遺跡の製品はその分布に広狭はあれ各地に搬出し一定の流通網を形成している。しかしその間にも製作技法に相違がみられるだけでなく、その製品の形質にも相違がみられ、このことが分布の広狭と関連するようである。その基底に素材差が

あることも考慮の必要があるが、製品差が流通網の形成に深くかかわっているとみられるので、その相違を幅厚相関図などにおいて確認が必要かと考えられる。

⑤土器が一定の地域ごとに特有の型式を保持するように、弥生伐採石斧も一定の範囲においてやはり地域型をもっている。この型式差は風習差を示していることが多いが、その差が機能差を示していると考えることができるケースもある。前者においては文化差として捉えることができ、後者の場合、個々の樹木の伐採能力に密接に関連し、それはひいては地域の開発能力の差に関わると想定される。

以上の事柄の解明のためには、幅と厚さから得られる各地毎の段階に応じた地域形の設定と相互比較が試みられなければならない。

上記の諸課題を解明しようとするなら、多数の完形伐採石斧に依拠して、それを分析するのが

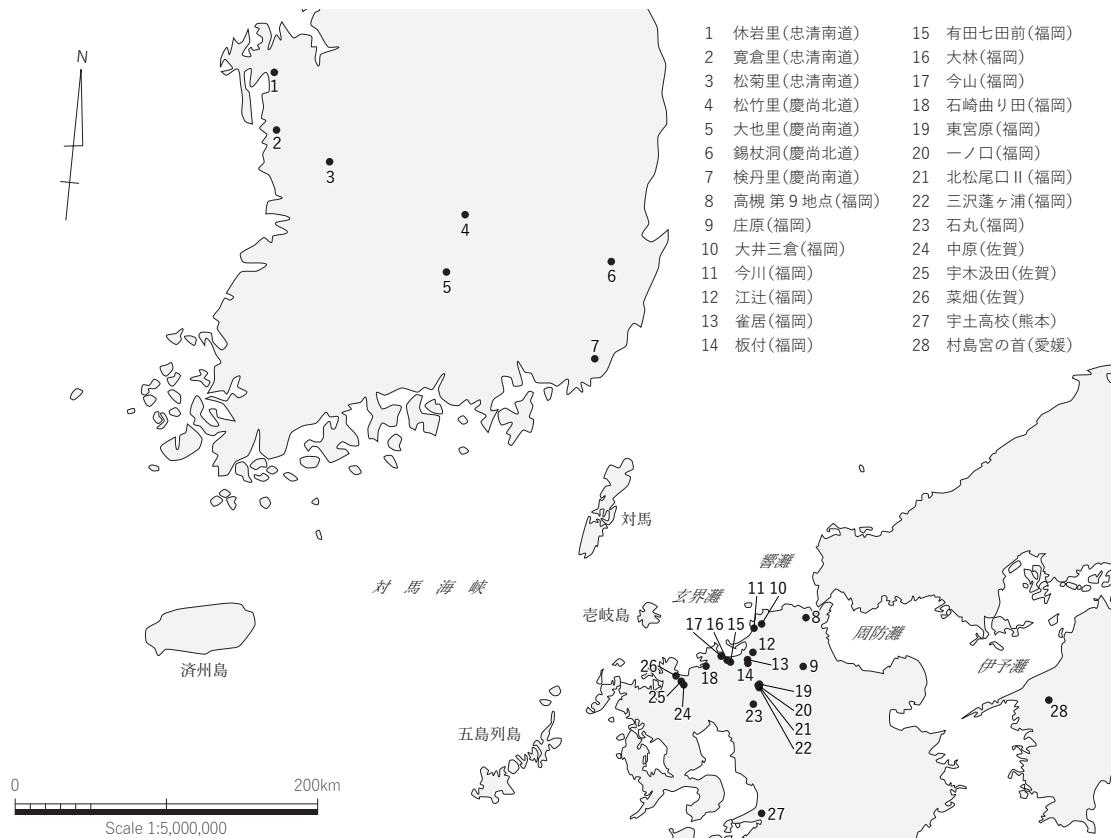


図4-01 関係遺跡分布図

もっとも堅実かつ安定的と思える。確かに、そうした条件を満たす伐採石斧を出土する遺跡は偶には存在することもある。しかし、圧倒的にはこうした完形石斧はおろか石斧破片1点すら出土しない遺跡も多々あって、良質資料の収集はそう簡単ではない。こうした状況のなか、しばしば遭遇するのは、完形伐採石斧が何かの要因によって損壊され、石斧破片として出土するケースで、むしろこのケースがもっとも多いと言える。こうした破片資料を活かして、上記課題の解明に資する方法として考えたのが表題の「幅と厚さ」の相関法である。

「幅と厚さ」に着目したのは、北部九州の伐採石斧の発展を説明するまでの便法からであった。北部九州では弥生文化出現期における伐採石斧は身が薄い薄斧であることが多く、それがいくつかの径庭を経て、前期後半から中期の盛期になるといわゆる「太形蛤刃石斧」と言われる身が厚い厚斧となる。この現象を数字的に表現する手段として、身幅に対する厚みを厚斧率と称して石斧の発展展開を説明した〔下條2014〕。その結果だけを簡明に述べると出現期の縄文晩期後半から板付I式段階では厚斧率は40%台、板付II式古段階では50%台、板付II式後半から中期の伐採石斧盛期になると60%以上と厚斧率が徐々に増加していくことが判った。太形蛤刃石斧はまさにこの盛期の例である。このことから所要の幅と厚みを残している石斧破片は、石斧分析の資料として有効であるとするにいたった。

伐採石斧を型式規定するには、これが大木を伐採するという機能を本質とする道具であるから形質において取り扱われなければならない。そのためには次のような観点からの検討が必要であり、

伐採石斧が報告されるときはこれらの要素が満たされていなければならない。また厚さは箇所箇所で異なるので、任意の横断面図だけでは不十分で、側面図ないし縦断面図が不可欠である。

- ①平面形、②長さ、③幅
- ④厚さ、⑤重さ、⑥石質

完形品であれば容易にデータがとれそうであるが、注意を要するのは幅と厚さの測点である。太形蛤刃石斧の場合、平面形はおおよそ長方形をなすので、幅はどこを測点としてもそう変わらないことが多いが、それでも厚さは箇所によって異なってくる。伐採石斧を基部（頭部）、体部、刃部に分けるとその厚みの形は2種類に分かれる。1は基部から体部へとその厚みはそう変わらないままに下降し、下方の刃部に及ぶにいたって薄くなるケースである。2は基部から体部に向かって徐々に厚みを増し、石斧下方の刃部の直上において最厚となるケースであるが、この最厚部で幅と厚さを採寸することが適当である。したがって前者の場合も刃部直上で採寸することになる。

少し厄介なのが、出現期の伐採石斧の場合である。この期の伐採石斧は平面形が長台形をなすので基部に狭く、刃部に広い基窄刃寬形であるから、測点次第で幅の寸法に相当差が出てくる。基部で採寸するのと刃部で採寸するのとでは相当の違いが出てくる。厚みは基部体部が一体のものが多く、刃部にいたって変化が生ずる。基部体部一体とはいえ、体部から刃部への変換部で最厚となるものもあるので、太形蛤刃石斧同様、体刃変換部の直上あたりに測点を求めるのが適当である。こうして平面長台形も長方形も1つの基準でデータをうることができると、前者は扁平品なだけにその見分けが難しいものもある。

## 1. 長さの違いは幅・厚さの違いとして現れる

平面同一形の伐採石斧を分類するとき、最もわかり易い視点は長さである。長さは短くとも10数cm、長いものは20数cmもあるので、もしそこに大小があるとすれば、長手群、短手群と容易に分別することが可能である。これが石斧破片となると、その残存度合いが小さいほどその大小の識別は困難のようにみえる。

ところが、実際の出土事例からすると破片が圧倒的であるから、この破片に依拠して何とか分類の手立てをたて、破片からでも大小の分別が可能にしたいものである。その手立てとしては生産地が明らかな完形石斧をとりあげ、長さから分別した大小と幅・厚さの大小とが相関する関係にあるかどうかを検証する必要がある。その検証事例として、九州に広域に流布する今山遺跡(福岡市西区今宿)で生産された今山製石斧例と、高槻遺跡第9地点(北九州市八幡東区松尾町)の例を取り上げてみよう。今山産石斧であるなら、材質は1つ、時期も産地も限定されているのでどこから出土しようと同じ出自のものとして扱うことができる。

こうした検証事例に一番いいのは、1つの生産工房でつくられたものである。製品の類似性が高いからである。ついで望ましいのは時期を特定し

ての1遺跡からの出土品であろうが、この場合あちこちの產品が混じっている可能性があり、それだけにデータにノイズが入り込む余地が高くなる。資料の量としては10点程度は欲しいところであるが、そううまくはゆかないのが現状である。

### (1) 今山遺跡の場合

(図4-02,03,07上段、表4-01)

今山遺跡の伐採石斧は高さ80m余の同山を構成する柱状節理が崩壊して塊石となった玄武岩を利用して石斧生産を図ったもので、前期後半に始まり、中期中ごろまで生産された。生産数は数えきれないほどの多量で、現地からは欠損した未完成品が数多出土し、佐賀・福岡の北部九州を中心に、熊本・大分の中部九州から数は少ないが南は南部九州の鹿児島に及ぶ。ほとんどが破片としての出土であるが、管見によればそのなかに15本ほどのほぼ完形品が存在する。

図4-03は完形の今山石斧を長さ(L)、幅(W)、厚さ(T)の3点から表現したものである。グラフの縦軸上に長さを、その底辺で縦軸に直交する横軸の、縦軸の左側に幅を、右側に厚さをプロットして、その3点を結んで三角形に表わしたもので

表4-01 今山石斧の分類と法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法量				厚斧率 (W/T)
				全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g	
大形品	L1	中原	佐賀県	26.1	7.30	5.5	1,824	75.3%
大形品	L2	北松尾口II	福岡県	22.9	7.95	5.3	1,650	66.7%
大形品	L3	北松尾口II	福岡県	22.7	7.70	4.2	1,150	54.5%
大形品	L4	板付	福岡県	22.0	7.25	5.1		70.3%
大形品	L5	三沢蓬ヶ浦	福岡県	22.0	8.60	5.3	1,580	61.6%
大形品	L6	宇土高校	熊本県	22.0	8.00	5.2		65.0%
大形品	L7	北松尾口II	福岡県	20.8	7.70	4.2	1,150	54.5%
大形品	L8	一ノ口	福岡県	20.8	8.20	5.0	1,420	61.0%
大形品	L9	一ノ口	福岡県	20.6	7.80	4.7	1,285	60.3%
大形品	L10	大林	福岡県	20.4	7.10	3.3		46.5%
大形品	L11	一ノ口	福岡県	19.4	7.10	4.6	945	64.8%
小形品	S1	一ノ口	福岡県	16.4	7.0	4.1	795	58.6%
小形品	S2	一ノ口	福岡県	15.4	6.3	4.2	700	66.7%
小形品	S3	庄原	福岡県	15.1	7.1	4.4		62.0%
小形品	S4	東宮原	福岡県	14.1	7.0	4.3	750	61.4%

※ゴシック体は推定値

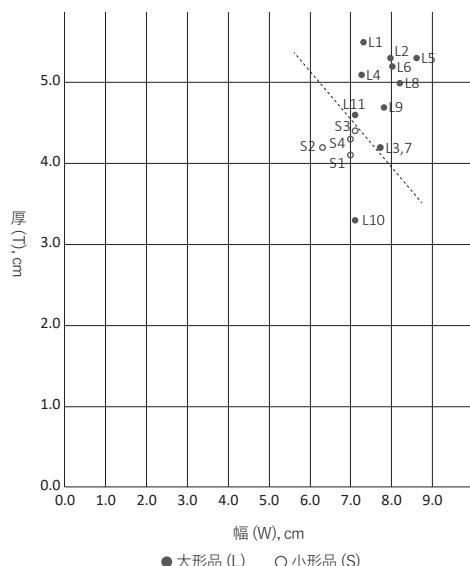


図4-02 今山石斧の幅厚相関図

ある。これを見ると三角形の群が実線の群と破線の群とに大きく2つに分かれていることが直ちに見て取れよう。

なかでも長さ(L)において、2つの間に群差が存在することは一目瞭然と言えよう。大が11点で、小が4点である。大は長19.4～26.1cmで、小は14.1～16.4cmの間にあるから最小でも3cmの差があり、両者は歴然と分別できる。大は通常20～23cmで、小は14～16cmであるから通常には長5cm前後の差としてとらえることができる。

この長さによる大小差がどのように幅・厚さに投影してくるのか。幅の方から検討すると、大方の幅を見ると、幅(W)は7.1～8.6cm間にあり、7cm台の後半から8cmの間に集中している。小の方は6.3～7.1cm間にあり、ほぼ7cmに集中している。小の上限と大の下限が接しているが通例的には0.5～1.0cmの差がある。長さに比べ横幅の広がりには限界があり、大小が接近せざるを得ないが、通例では0.5～1.0cmの差異が認められるように長さに応じて幅も差がつく。

厚さ(T)は、大は3.3～5.5cmの間にあるが3.3cmと異常に薄い大林遺跡(福岡県福岡市西区)例を除くと4.2～5.5cm間となるが中心的な厚さは4cm台後半から5cm前半の間にある。小は4.1～4.4cmと4cm前半でまとまっているので、厚さは4.5cm

を境にして大小分かれている。やはりこのように長さに応じて厚みにも大小の差が反映している。大で最も薄身の北松尾口遺跡II地点(福岡県小郡市)出土の2例などは、厚さだけとると小の範疇に入るが、幅を見れば2例とも7.7cmで完全に大の範疇にあることでもあり、一面からだけの指標で判断するのではなく、幅・厚さの両者から同時的に、相関的に評価しなければならない。その同時的相関的に表現したのが図4-02の幅厚相関図で、これによるとこの2例は全く小の領域に属さないことがわかるであろう。さらにその重量をみると、この2例は一部欠けていても1,150+gの値を示して、小の700g台の値を大きく凌駕して大の実力を表している。

先に除外して扱った大林遺跡例は、3.3cmと常識外の薄さを示している。これは採集品で共伴時期が明らかでないが、この厚さは小よりもさらに薄身の異常な数値である。玄武岩製品のなかでも製作開始時のそれには初期弥生期の特徴を引いて薄身につくられたものがあり(吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼市・吉野ヶ里町)のSD001出土品などは厚さ3.0～3.7cmの薄身品で、他にも例がある)、大林遺跡例もその類品と考えたい。

図4-02の幅厚相関図を観ると、2つのグループに分かれることが判るであろう。右上が長さで分けた大のグループに相応し、左下が小のグループに相応するのである。これが示すように、長さ基準の分類が幅・厚さにも投影しており、的確な破片から幅・厚さを採寸すれば、実長は判らなくても大小が存在することは明らかにできる。いくつかの完形品が存在すれば直ちに幅・厚さから実長や重量をも復元することができる。

今山石斧の大形品小形品の標準的な諸属性をまとめると下記のようになる。

	大形石斧	小形石斧
長さ(L)	20～23cm	14～16cm
幅(Wi)	7.5～8.0cm	7.0cm
厚(T)	4.5～5.5cm	4.0～4.5cm
重(We)	1.5～1.8kg	0.7～0.8kg

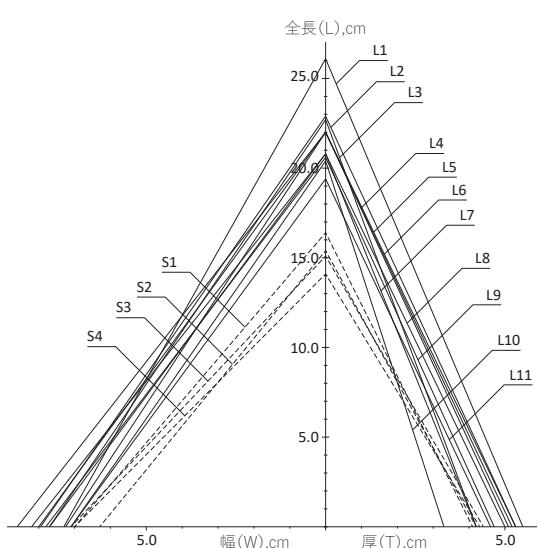


図4-03 3点法(長・幅・厚)による今山石斧の型式表現

## (2)高槻遺跡第9地点の場合

(図4-04,07中段、表4-02)

この遺跡も早くから弥生伐採石斧の生産遺跡として著名で、主に付近に産する安山岩質凝灰岩によって多量の伐採石斧を生産している。前期末を中心に中期に及んでいる。

伐採石斧のみならず、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、鑿形石斧、石庖丁、大形石庖丁、石戈などの未成品や成品が出土し、成品の多くが欠損しているところをみると、その生産は自己使用にも振り向かれていたことが判る。

伐採石斧には多量の未成品と若干の完成品とが出土しているが、完成品の多くはどこかが欠けており、この集落で使用されていたことが推し量られる。完成品には大形品と小形品がある。小形品にはほぼ完形品が数点あり、その全長をつかむことができる。大形品としたものはすべて折損品で完形品がなく、明確にその全長を把握できないが、折損品でもその残存長は小形品の最長品と同等ないしは凌駕する大きさであるから、大形品が存在することは明らかである。幅・厚さも容易に大小が存在することを示している。

小形品の例としてとりあげたのは7点で、うちほぼ完形品が4点である。完形品の長さは13.6cm(718—斜字は遺物番号を表す、以下同じ)、14.4cm(722)、15.0cm(712)、16.4cm(715)で、13cm後半～16cm前半に収まる。

刃端が1cmほど欠ける残りの3点は14.8+cm(700)、12.0+cm(708)、14.8+cm(713)で、復元すれば前掲の諸例とほぼ同長となる。

7点の幅は5.2～5.8cmと僅か0.6cmの間に収まり、その均一性は高い。残余の同類品4点をみても5.3～5.8cmの間にあり、上掲例にピシャリと一致し、横幅の均質性を裏付けることができた。7点の厚さは、3.7～4.2cmの僅か0.5cmの間に収まり、残余の例も同断である。

重さについては、558g(712)、617g(715)、527g(722)、416g(718)と、500g後半～600g前半の間にある。718がやや軽量であるのは、欠損部が

少し大きいためである。残余の3例は599g(700)、528g(713)、460g(708)で欠損部分を割り増しする必要があるが、上掲のなかで収まとみられる。

次に、大形品の10点である。すべて折損品だが、その残存長は長い方から17.0+cm(691)、16.8+cm(680)、16.3+cm(679,681)、16.2+cm(683)で、復元すれば優に小形品の全長13cm後半～16cm前半を超える。完形品はおそらく全長20cm未満くらいであろう。北九州市域内で製作された伐採石斧を受容したと考えられる下稗田遺跡(福岡県行橋市)出土の伐採石斧を分析した梅崎の分類からすると、17～19cmほどになろうか(梅崎1996)。

幅は8点が6.5～7.2cm間に集中し、7cm前後を6点が占めている。もっとも細いのが6.3cmで2点あるが、小形品の幅5.3～5.8cmとは明らかに一線を画している。厚さは4.5～5.5cm間に分布するが4cm後半から5cm前半の5cm前後に集中している。中に1点、3.7cmという小形斧並みの厚みしかない例がある(680)。しかし幅は7.1cmと広く、重量は784+gもあり、十分に大形品としての用件を揃えている。後に示す図4-04の幅厚相関図を見れば、大形品の領域に属していることが了解できるであろう。大形品と小形品の長さの違いは当然ながら幅・厚さの違いとして現れ、さらには重量において大きな差として現れる。小形品は460～617g間のものであるが、大形品は折損品でありながら700～900gはあり、完形品ともなればさらに差は大きくなるであろう。上記した梅崎の分析によれば900～1,100gほどになり、ここに大小差が歴然と表明している。

高槻遺跡第9地点出土の完成伐採石斧の各属性の標準的な法量を整理すると下記のようになる。

	大形品	小形品
長さ(L)	16.6+～(19)cm	13cm後～16cm前
幅(Wi)	6.5～7.2cm	5.2～5.8cm
厚(T)	4.5～5.5cm	3.7～4.2cm
重(We)	700+～900+g	500g後～600g前

表4-02 北九州市・高槻遺跡第9地点出土伐採石斧  
法量一覧

分類	No.	法量				厚斧率 (W/T)
		全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g	
大形品	678	15.6	6.8	5.3	878	77.9%
大形品	679	16.3	6.8	5.2	870	76.5%
大形品	680	16.8	7.1	3.7	784	52.1%
大形品	681	16.3	7.1	4.5	890	63.4%
大形品	682	16.0	7.1	4.8	950	67.6%
大形品	683	16.2	7.2	5.5	880	76.4%
大形品	691	17.0	6.7	5.0	950	74.6%
大形品	692	13.5	6.5	4.8	617	73.8%
大形品	693	13.5	6.3	5.2	743	82.5%
大形品	694	13.6	6.3	5.0	739	79.4%
小形品	700	14.8	5.6	4.2	599	75.0%
小形品	708	12.0	5.8	3.8	460	65.5%
小形品	712	15.0	5.6	4.1	558	73.2%
小形品	713	14.8	5.4	4.1	528	75.9%
小形品	715	16.4	5.7	3.8	617	66.7%
小形品	718	13.6	5.4	3.7	416	68.5%
小形品	722	14.4	5.2	4.1	527	78.8%

※ゴシック体は推定値

大形品と小形品を比較すると、長さで3cm前後、幅で1cm強、厚さで1cm弱、重さで4～500gの差があり、両者の間には歴然とした差があり、弥生伐採石斧には大小の2種の存在が確立していることが判る。

図4-04は横軸を石斧幅、縦軸を石斧の厚さとし、採寸した各々の数値をプロットして得た高槻遺跡第9地点の幅厚相関図である。図が示すように、明らかに大形品と小形品とでは分布領域がこなっており、2者が存在することを示している。そしてそのことを視覚的にわかり易く示している。

また幅と厚さは有機性をもった存在で、個々ではなく両者を同時的に把握することによって型式的位置づけが明確になってくる。

大小の違いは完形品であれば長さについては視覚で、重さは手持ちによって直感的に確認することもできる。しかし残念なことに、伐採石斧の完形品の残存例は極めて希少なので、その少ない資料では安定したデータは得ることができない。型

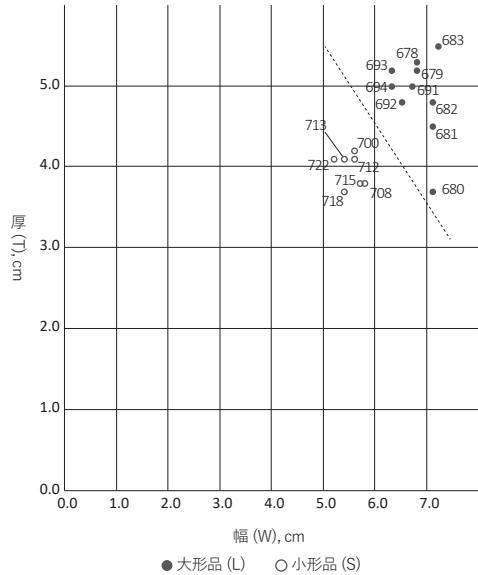


図4-04 高槻遺跡第9地点出土伐採石斧の幅厚相関図

式化に安定性が欠ける。そこで圧倒的に出土事例が多い伐採石斧の破片に着目し、その中からデータを得るのに適切な破片を選定し、幅厚の的確な数値を得ることによって、この面から当該石斧の型式化の一助を得ることができる。それら破片に伴って若干の完形品を得ることができれば、それらと合わせて、完全形をもってして型式化を果たすことが可能となる。そうでなくとも、幅・厚さのデータだけでも、時代性、地域性その他のことは示すことができるが、それについては以下においておおいと述べてゆくこととする。

こうして得られた大小の石斧の同時的存在は多分、使途の違いによるものと想定される。大形品はいうまでもなく木製農具などの作製の材となる堅緻なカシの大径木の伐採に供されたとみられ、小形品は小径木や枝打ちの伐採やくさびなどとして使用されたことなどが考えられる。これは伐採石斧の使途分化がすでに進行または確立していたとらえることができ、いつまでも伐採の一語で片付けておくことができないことを示している。

## 2. 北部九州の初期稻作期の伐採石斧と 韓半島南部および北部九州中期の伐採石斧との比較

### (1) 玄界灘沿岸における初期稻作段階の 伐採石斧の特徴 (図4-05,07 下段、表4-03)

初期稻作段階(縄文晚期後半～板付II式古段階)における伐採石斧の特徴は如何なものであろうか。初期稻作受容地である玄界灘沿岸(佐賀県唐津平野、福岡県糸島平野、同福岡平野、同柏屋平野など)における伐採石斧の特徴を分析してみよう。上述の今山や高槻遺跡のように1遺跡での集中生産が始まる前の段階であるため、その製作は個々の遺跡を単位として行われた。そのため、同一遺跡内でも、また遺跡間でも形態や法量においてのバラツキがあるのを前提のうえ、図4-05の幅厚相関図を参考として以下に最大公約数的にまとめてみよう。

①上記地域出土の該当期のほぼ完形の伐採石斧18点を検討対象とした。

②平面形は基部(頭部)が狭く、刃部が広い、基窄刃寬の台形をなす。大方は基部から刃部に向けて徐々に緩やかに拡大する長台形をなすが、中

には急激に拡大して、三角形状に近いものもある。

③全長が15～20cmの大形品と9～13cm台半ばの小形品とに分けることができる。盛期の伐採石斧が大小から組成されることはすでに今山、高槻遺跡例でみたが、こうした組成は稻作出現期からあったようだ。

④厚みは薄く、2～3cm前半台の板状をなし、弥生伐採石斧通有の厚みのある太形蛤刃形をなすことはない。

⑤一方、幅は大形で7～8cm前半、小形で5～6cm半ばで、太形蛤刃と同等か広い。幅はすでに記したように刃部に移る直上あたりの最厚部を採寸位置にしている。

⑥したがって、厚みの度合いを示す厚斧率(厚みを幅で除した数値)は30～40%台と低い。太形蛤刃石斧の場合、通常60～80%台であるので、厚みが相当に薄いことが特徴といえる。

⑦重量は大形品で5～600gで、縄文時代の伐採石斧と変わらない。そのなかで厚さは扁平(厚

表4-03 玄界灘沿岸の初期稻作期の伐採石斧法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法量				厚斧率 (W/T)
				全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g	
大形品	L1	菜畑	佐賀県	19.2	7.2	3.0		41.7%
大形品	L2	菜畑	佐賀県	15.0	7.0	3.2	580	45.7%
大形品	L3	石崎曲り田	福岡県	16.7	7.2	3.7	554	51.4%
大形品	L4	雀居	福岡県	18.6	8.0	2.5	505	31.3%
大形品	L5	江辺	福岡県	16.2	6.6	2.9		43.9%
大形品	L6	今川	福岡県	21.0	8.5	3.4	1,038	40.0%
大形品	L7	板付	福岡県	15.0	7.6	3.0		39.5%
小形品	S1	菜畑	佐賀県	11.3	5.8	2.7		46.6%
小形品	S2	菜畑	佐賀県	12.8	7.5	3.5	550	46.7%
小形品	S3	宇木汲田	佐賀県	13.5	6.7	4.2		62.7%
小形品	S4	宇木汲田	佐賀県	11.4	5.6	2.0		35.7%
小形品	S5	雀居	福岡県	9.4	5.0	2.8		56.0%
小形品	S6	雀居	福岡県	9.7	5.8	2.5		43.1%
小形品	S7	板付	福岡県	12.4	6.5	2.3		35.4%
小形品	S8	有田七田前	福岡県	13.4	6.6	2.4		36.4%
小形品	S9	石丸	福岡県	10.6	4.2	2.2		52.4%
小形品	S10	江辺	福岡県	13.6	6.0	2.2		36.7%
小形品	S11	大井三倉	福岡県	13.6	5.4	2.8		51.9%

※ゴシック体は推定値

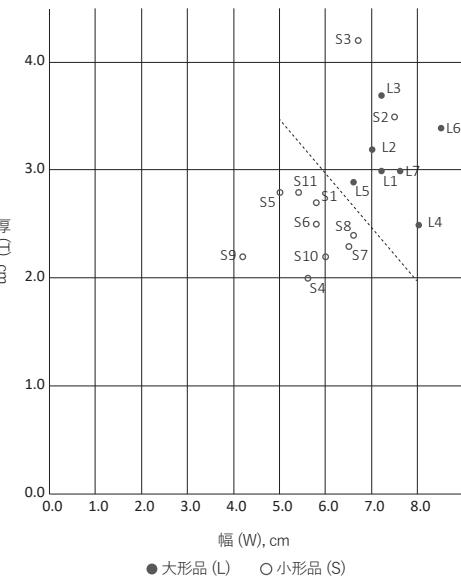


図4-05 玄界灘沿岸初期稻作期の  
伐採石斧の幅厚相関図

斧率 40%) ながら 1,000g に及ぶものが 1 例 (今川遺跡 (福岡県福津市)) あるが、これは太形蛤刃石斧製作に向かっての胎動品とみられる。

相関図のなかに、小形品でありながら、大形品の領域に属しているのが 2 例ある。その一の宇木汲田遺跡 (佐賀県唐津市) 例は長さ、幅は小形品の領域に収まるが、厚みが極端に厚く、大形品の厚みさえ凌駕する数値を示している。厚斧率も 60% を超え、太形蛤刃並みであるが、かといってその領域にも属さない一種の特殊品かと考えられる。

## 2) 韓半島南部の伐採石斧との比較

(図 4-06,08、表 4-04)

北部九州の玄界灘沿岸にまずもって稻作文化を伝えた韓半島南部の伐採石斧と玄界灘沿岸のそれを比べてみよう。玄界灘沿岸に稻作を伝えたのは無文土器文化前期の終わりころの松菊里・検丹里段階であるが、半島で伐採石斧の出土事例が豊かになるのはその前の段階の駅三洞段階 (孔列文土器期) からである。

孔列文土器に伴う伐採石斧例はあまり明確では

ないが大形伐採石斧と小形伐採石斧の 2 者がすでにあったようである。それが次の松菊里・検丹里段階になると大小とも器体の大きさに変化が生じ、長さ、幅、厚さにおいて少し大きくなる。長さにおいて 8 ~ 17.5cm くらいであったものが 12 ~ 22cm に、幅において 4.5 ~ 7 cm であったものが 6.5 ~ 8cm に、厚さにおいて 2.5 ~ 4 cm であったものが 4 ~ 6cm へと伸長するのであるから、石斧能力は一段と強化されたものとみていい。因みに厚斧率は孔列文土器期には 50% 台のもあるが 70% 近くに達したものも多く、厚斧段階に到達している。幅と厚みがバランスよく設計されて厚斧となっている。しかるに松菊里・検丹里段階の厚斧率は 60% 後半 ~ 80% 近くにも達し、一段と成長した厚斧となっている。図 4-06 にみると、大形品と小形品があり、幅・厚さだけでなく、他のデータを付加すると次のようになる。

	大形品	小形品
長さ (L)	20 ~ 22cm	11.5 ~ 15.5cm
幅(Wi)	7.3 ~ 8.0cm	6.0 ~ 7.0cm
厚(T)	4.4 ~ 6.0cm	4.0 ~ 5 cm強
重(We)	1,759g	

表4-04 韓国無紋土器時代の伐採石斧法量一覧

分類	No.	出土遺跡	地域	法量				厚斧率 (W/T)
				全長 (L) cm	幅 (W) cm	厚 (T) cm	重量 g	
大形品	L1	松竹里	慶尚北道	21.8	8.2	6.4	1,759	78.0%
大形品	L2	松竹里	慶尚北道	20.0	7.3	4.0	855	54.8%
大形品	L3	錫杖洞	慶尚北道	19.2	8.0	4.4		55.0%
大形品	L4	寛倉里	忠清南道	17.0	6.5	4.2		64.6%
小形品	S1	検丹里	慶尚南道	12.2	6.8	4.5		66.2%
小形品	S2	検丹里	慶尚南道	13.4	6.9	5.0		72.5%
小形品	S3	検丹里	慶尚南道	13.3	7.0	4.5		64.3%
小形品	S4	検丹里	慶尚南道	11.8	6.9	4.6		66.7%
小形品	S5	検丹里	慶尚南道	13.2	6.5	3.9		60.0%
小形品	S6	大也里	慶尚南道	10.0	6.2	4.2		67.7%
小形品	S7	休岩里	忠清南道	15.4	6.2	4.5		72.6%
小形品	S8	寛倉里	忠清南道	14.7	7.2	6.2		86.1%
小形品	S9	松菊里	忠清南道	14.6	6.5	5.2		80.0%
小形品	S10	松菊里	忠清南道	13.5	7.0	5.0		71.4%
小形品	S11	松菊里	忠清南道	14.2	5.9	2.5		42.4%

※ゴシック体は推定値

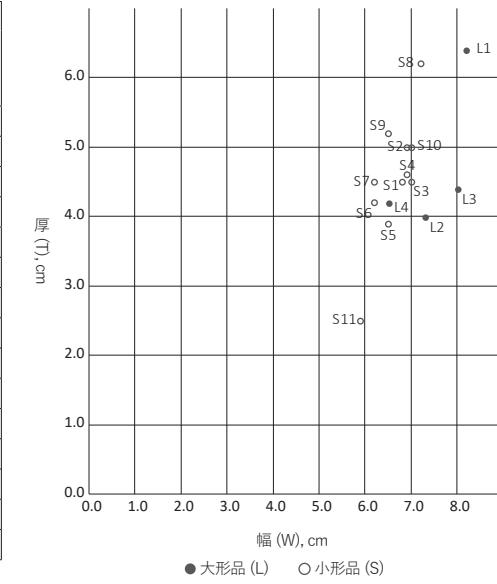


図4-06 韓国無紋土器時代の伐採石斧の  
幅厚相関図

大形品の 1,759 g 例は松竹里（慶尚北道）出土品であるが、重さのみならず長さ、幅、厚さは先記した今山製品並みである。ただ、大形品の完品はこの例くらいで、さらなる出土例の充実が期待される。大形品と小形品の法量関係はほぼ相似的関係にあるが、長さはもちろん幅において 2 者間の差が顕著で、厚さにおいても差が明確な例もあるが、両者が接触ないし重なる部分があり、この点曖昧さをのこしている。大形完形品の類例の増加をまってこの点は明らかにしてゆきたい。大形品の出土例は散発的で、小形品の方が出土例が多く各地から満遍なく出土する。

次段階の粘土帶土器の段階にも類似形態の伐採石斧が大小とも存続するが、そこからデータを借用すると大形品は重さおおよそ千数百 g で、小形品は 7 ~ 800g ほどになりそうだ。

玄界灘沿岸の稻作初期伐採石斧の幅厚相関図である図 4-05 と、韓半島松菊里・検丹里段階の幅厚相関図である図 4-06 を比較すると、両者の間には大きな懸隔がある。

韓半島の松菊里・検丹里段階の伐採石斧の平面形が大形品は少し中膨れの長方形で小形品は刃部方向に僅かに広くなった長台形であるのに対し、列島初期稻作期のそれは強長台形といえるもので両者の間には平面形のうえでの連絡関係はない。また身の厚さは厚斧率が示すように半島のそれは 60% 以上の厚斧であるのに対し、列島のそれは 40 ~ 50% 前半台の薄斧であるなど異質の関係にある。そのことは重量にもよく現れていて、半島の大形品が千数百 g であるのに対し、列島の大形品は 5 ~ 600g しかなく、伐採石斧の機能の上でおおきくものをいう重量が両者の間で大きく懸隔があり、両者間の機能差は著しい。

かようにみると、半島南部からは初期稻作の伝播にともなった多様多種の文物が伝わるとはいえ、水田經營において鋤鍬などの農具作成に供する直径 60 ~ 80cm もあろうかという堅緻なアカガシなどの大径木の伐採に不可欠な、強力な伐採石斧を列島は受容することはなかった。縄文レベルと変わらないような低能力の伐採石斧でそれに

対応していた。したがって初期農耕時の開発は実際にスローな展開にならざるを得なかった。したがって伐採石斧に関する限り初期稻作期に韓半島から影響を受けることはなく、縄文斧の改良で対応していた。高速の開発を望んでいなかったのである。

### (3) 今山石斧との比較 (図 4-02, 05, 07)

北部九州の初期稻作期である古期段階の伐採石斧と前期後半から中期の新期の伐採石斧とを幅厚相関図を使って比較してみようとするものである。図 4-05 が前者の幅厚相関図、図 4-02 が後者の幅厚相関図で、図 4-07 の上段と下段で視覚的に確認しながら以下に両者を比べてみよう。

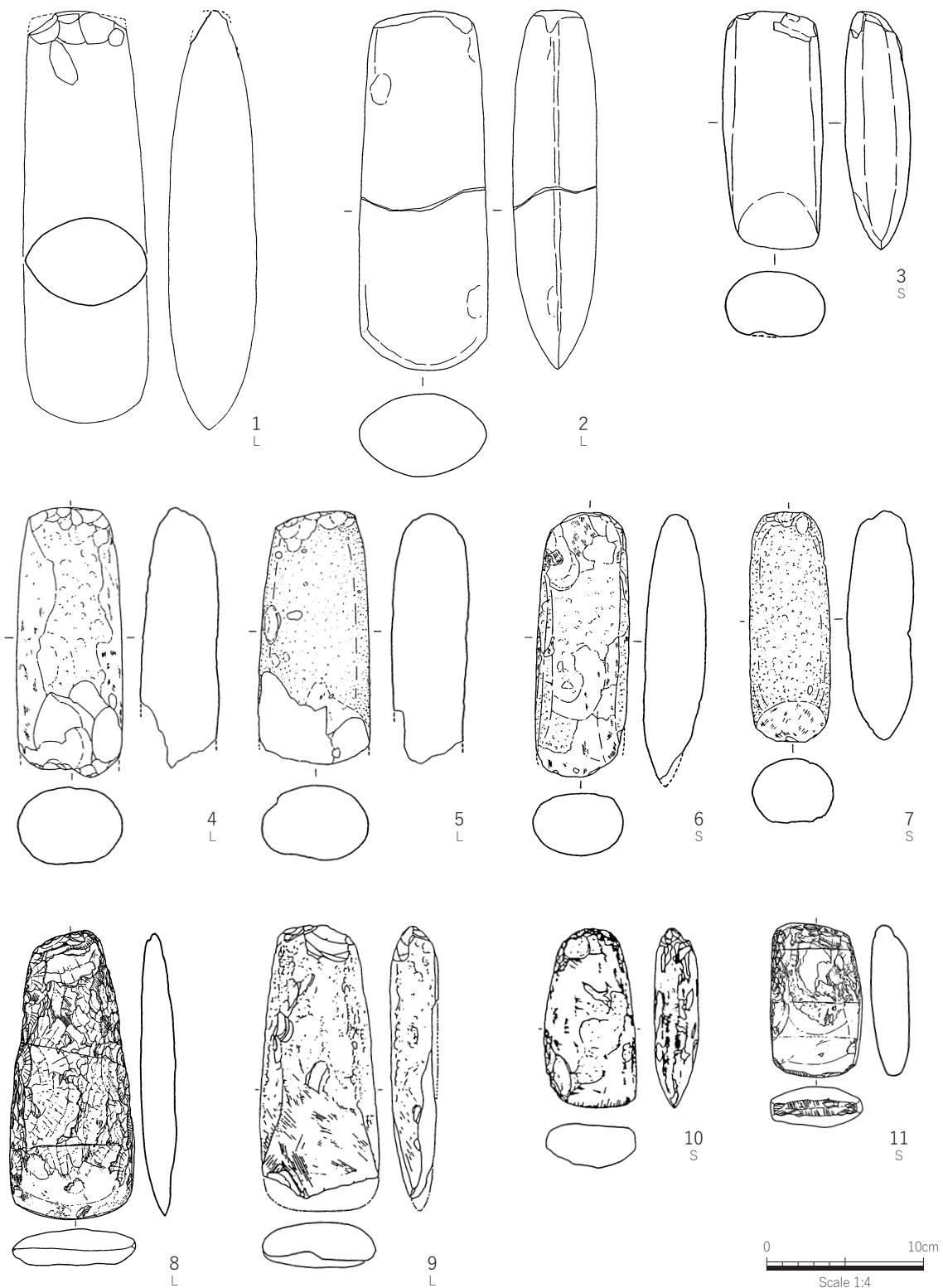
両者とも大形品と小形品とからなるが、いずれもその間には大きな差がある。

小形品をみると、その幅は古期が 4 ~ 7 cm で、新期が 6 ~ 7 cm で、新期は古期の上限付近にまとまっている。古期の幅は多くは 5 ~ 6 cm 間に集中していることからすると新期は 1 cm ほど幅広ということになる。また古期の幅には集約性がないのが特徴で、3 cm ものブレがあるのはまだ弥生的伐採石斧の定式化が確立していないからとみられる。

両者の差が顕著なのは厚さにおいてである。古期は 3 ~ 4 cm の間にあるのに対し、新期は 4 cm 強で、その間に 1 cm 強の開きがある。

大形品については、その幅は古期が 7 cm 弱 ~ 8 cm 間にあるのに対し、新期は 7 ~ 8 cm 強の間で、大形品がわずかに勝る程度である。両者の差はここでも厚さにおいて顕著に現れる。古期が 3 cm 弱 ~ 4 cm 弱間であるのに対し、新期は 5 cm 前後で 1 cm の差がついている。つまり小形品も大形品も新期は古期よりも厚さにおいて 1 cm も厚く、厚さにおいて両者の間に著しい差異があることが判る。そのことはこの幅厚相関図をみれば一目瞭然である。

長さにおいては、古期は小が 10cm 弱 ~ 13cm 強、大が 15cm ~ 20cm 弱で、新期今山の小が 15cm 前後、大が 20cm 強に比べていずれも短め

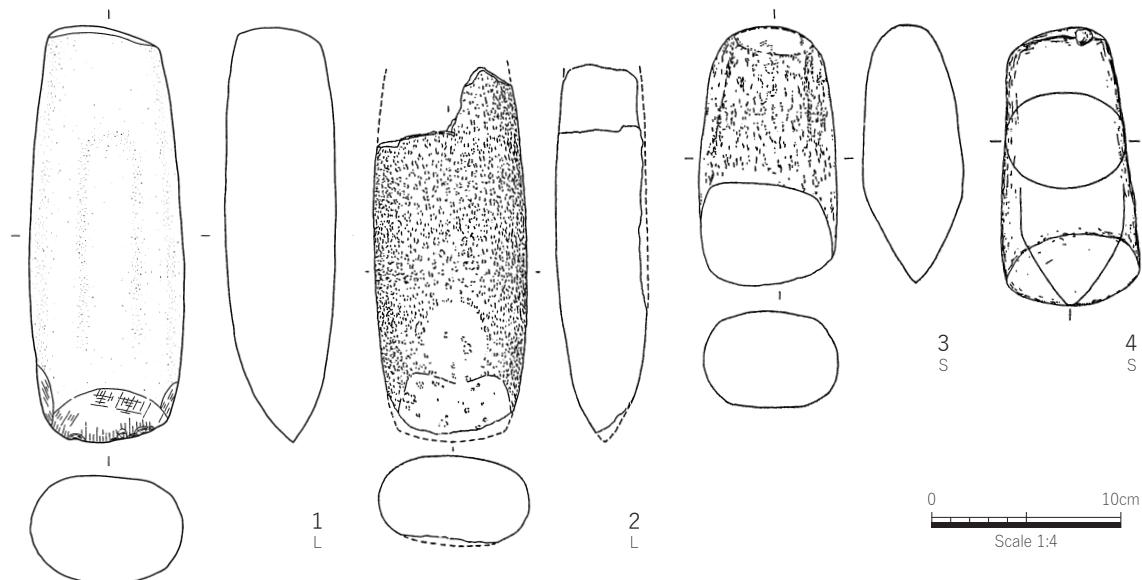


上段:今山製石斧—1. 佐賀 中原(L), 2. 福岡 北松尾口(L), 3. 福岡 一ノ口(S)

中段:福岡 高槻遺跡第9地点出土石斧—4. 691(L), 5. 682(L), 6. 715(S), 7. 722(S)

下段:玄界灘初期稻作期石斧—8. 福岡 雀居(L), 9. 佐賀 菜畑(L), 10. 佐賀 菜畑(S), 11. 福岡 雀居(S)

図4-07 各地域および各遺跡出土の大形・小形の伐採石斧



1. 松竹里(L), 2. 錫杖洞(L), 3. 植丹里(S), 4. 松菊里(S)

図4-08 韓半島南部の大形・小形の伐採石斧

であるばかりでなく、古期は振幅が大きく均等性を欠いている。これも安定的作に欠けた初期段階の姿であろう。

両者のあいだの差異は、平面形（長台形と長方形）などにもみられるが、重量差において極端に顕現している。古期の大形品が6～700gと縄文伐採石斧とそう変わらない重量でしかないのに対し、新期の大形品は1,500g前後と2～2.5倍以上もあり、圧倒的な能力差を示している。伐採石斧の能力が刃の鋭さ前提にその重量による衝撃力に依拠することからすれば、その差は伐採という大地の開発行為の差を示すことになり、古期段階

における開発能力は、稻作開始期だからといって単純に高評価することはできない。稻作導入期、それを先進地として受け入れた玄界灘沿岸地域では、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、鑿状石斧や石庖丁その他、新たな農工用石器を韓半島から受け入れ駆使しながらも、開発の先頭に立つ伐採石斧を受け入れず、縄文石斧的能力の伐採石斧を使用することで対応した。こうした径庭を経てやがて今山石斧のような、ある種、韓半島のそれを凌駕するような太形蛤刃石斧を生み出していったのである。

(以下は次回報告書に掲載)

#### 【参考文献】

- 梅崎恵司 1996「東北部九州(豊前『企救』国)の弥生時代高櫛型石斧身の生産」『北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要』第10号、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
愛媛大学考古学研究室 編 2008『大陸系磨製石器論一下條信行先生石器論収集一』、下條信行先生石器論収集刊行会

- 下條信行 1994『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』平成5年度科学研究費補助金研究成果報告書  
下條信行 2014「生産具から見た初期稻作の担い手」『列島初期稻作の担い手は誰か』、すいれん舎